

第3章 二項対立と「市民」

これまで「民族」を記述してきたエスニシティ論では、民族集団やそのアイデンティティが国民国家を通過することで変化し、成員間で文化的差異を抱えるようになったのか、逆にそれらが国民国家以降でも不変で、成員が一体感を維持しているのかという対立のうち、どちらか一方の選択を記述の上で前提としてきたように見受けられる。これは、民族の枠組み、アイデンティティ、そして成員間の関係が「切断」されているのか、それとも「接続」されているのかという選択の問題として捉えることができる。もちろん、それらの折衷もしばしば見られるが、その記述は国民国家成立の影響を含んだ歴史的な物語を含んだものとなるために、あるいは、その選択が政治性を担うために、その前提として、あるいは結果として、どちらかの立場を強調せざるを得なかったように思われる。そして、そのために「切断」がなければ「接続」を理解することができず、また「接続」がなければ「切断」も理解できないことには十分な注意が払われてこなかったように見える。

それにいち早く気がついたのはスミス (1999 (1986)) であった。スミスは自ら歴史を「切断」し、「接続」していく。そして、あったのかもしれない「接続」、時間を想像し、壮大な可能性としての世界史を描き出す。

箭内 (1995) もこうした「切断」と「接続」を同時におこない、その記述によってハビトゥスを成り立たせる複数の同一性原理の関係からなる文化生成の可能性を示した。箭内はスミスとは異なり、共時的なハビトゥスを捉えることで、実証的な民族誌の作成に成功した。

本稿は、これらの先達の議論を参考に、さらに「プラジャ」を名乗る人びとが他者を自己に「接続」しようとする行為、つまり異人表象の分析を接ぎ木した。そして、そこから人びとの生活を「切断」し、さらにその「切断」とともに生じる各位相を、そのなかの諸イメージの形態的同一性、類似性を探り「接続」することによって、多位的な分析をおこなった。そのような「異人論」と多位的分析との接合により、本稿は人びとにとっての多様な他者の姿を自己イメージ抽出過程に組み込み、その結果として、チンランと国家のミジャール (徴税役) とのあいだに見たような、秩序の外部同士の「接続」可能性を示した。また、秩序外部の眼差しと秩序内部の存在である人びと自身の眼差しとが相互に重なり合うような様態を示し、秩序の内部と外部との入り組んだ対立、闘争の状況を提示した。このように本稿の「異人論」の接続は、「自己表象」の資源としての自己イメージ、民族イメージを、多様な秩序内外の関係から探る道を開いた、とすることができる¹。さらに本稿では、そうした操作を徹底的に繰り返すことにより、その限界 (外部) を提示することができた。

ここまで「プラジャ」の象徴世界と自己イメージの潜在的可能性を探りつつ、二項対立や二者択一を批判し、ダブルバインド状況からの抜け道を探るかたちで本稿の議論は進められてきた。しかし、その先に見えてきたのも内容は変わっても対立であり、闘争だった。だが、これはそのまま二項対立に舞い戻ったことを意味するわけではない。それは、本稿のこれまでの議論に見たように、この対立、つまり秩序の内と外のあいだには相互依存的な関係が隠されており、両者が重なり合う可能性があるため

ある。また、対立や闘争という状況にあっても対立の外部の現実に関心を向け、あるいは対立する当事者自身が自己を新たなかたちで「切断＝接続」することにより、世界を新たなかたちで想像し直すことができるからである。

「プラジャ」は、サールの世界で見たように、奴隷という社会の外部、言い替えれば他者の場から解放され、社会の一員として「包摂」された「市民」としてのイメージを持っていた。同様にチョールの世界では、「クスンダ」より優れた存在としてヒンドゥー社会、ネパールという国家に「包摂」され、またチンランの世界では現実的な「馴染み」の感覚に頼って他者を「包摂」し、平等感覚から「愛」する者であった。

だが、その「プラジャ」は「学歴が低い」「話ができない」者として「排除」され、またそうした者を「排除」し、自ら「未開」として「排除」されつつ「クスンダ」を「未開」として「排除」し、女性を交換の外部に「排除」することもあった。

このように「プラジャ」は他者によって「包摂」され、自ら他者を「包摂」してきた一方で、他者から依然として「排除」され、また他者を「排除」してきたように見える。こうしたイメージを接続していくと、対立や闘争を引き起こす可能性があるのは、すでに見たとおりである。そこから「プラジャ」は、「市民」として他者を「排除」するのか「包摂」するのか、という選択の問題を抱えている、と捉え直すこともできる。

しかし、「プラジャ」はそのどちらかを選ぶのではなく、ふたつの立場の対立のなかに留まりながら、新たな世界を想像し創り出すことで自己の世界と他者の世界を「接続」し、他者との関係を築いていく者としてのイメージも担っていた。もし、「市民」を他者との関係を築く者と言えるなら、「プラジャ」は、そのような「排除」や「包摂」とは異なる論理による「市民」となる可能性を秘めている、ということになるだろう。

そして、もし、私たちもそのような他者との関係を築くことができるのだとしたら、自己表象不在のまま「プラジャ」を名乗る人びとと私たちは、どこかで接続されている、ということになるだろう。

注

¹ 箭内は「力の原理」を「他者になること」により力を得ること（箭内 1995：226）とし、霊的存在などの他者の重要性を論じる。また、別のところで「他者」の空間（1995：279）についても論じている。だが、抽出する同一性原理から見出される他者相互の関係については詳しく論じていない。